上伊那教育会 主催

文 学 講 演 会 開 催

期日：令和４年10月20日　　会場：上伊那教育会館講堂

『井月の竄入句(ざんにゅうく)始末記』

堀井 正子 先生（近代文学研究家）

教育会の職能研修事業では、教師としての専門性を磨くとともに人間性の向上を図り、地域ともども生涯学習の機会とするために講習講演会事業を実施しています。文学研修は、哲学研修、授業研修とともに教育会の三大研修として位置づいています。今回の堀井先生の講演会は、一般の方の募集を取り止め、参加者を各校１～２名に制限する等、感染症対策を十分に行い実施しました。講演の様子は「ケルン」内で公開されています。

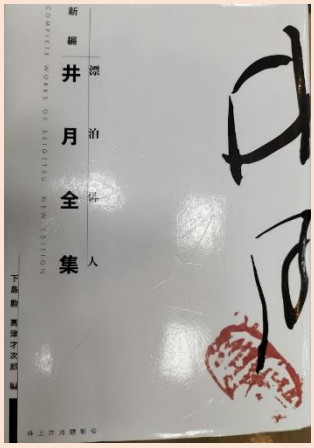
『堀井正子 先生 プロフィール』

千葉県生まれ 東京教育大学文学部卒業
高校教員、短大、長野高専、信州大学、中国の武漢大学等で講師を務める。
現在、県カルチャーセンター、八十二文化財団教養講座の講師、信越放送ラジオ「武田徹のつれづれ散歩道」にレギュラー出演中。信濃毎日新聞「クレソン」の「ことばのしおり」の執筆等を担当。
現在は、長野市に在住。
＜主な著書＞
「ふるさとはありがたきかな
　　ー女優松井須磨子ー」
「戸隠の絵本」
「源氏物語 おんなたちの世界」
「ことばのしおり」
「ことばのしおり 其の弐」
「出会いの寺 善光寺」　など

堀井正子先生　講演の概要

昨年は、大正１０年の下島ドクターによる『井月の句集』出版にいたるまでの芥川の応援奮闘が主なるテーマでした。今年はその後をうけて、昭和５年の『漂泊俳人　井月全集』出版のお話です。まず、井月ですが、３７歳のころ伊那に来たと言われています。６３歳で塩原家に籍を入れてもらい、入籍のおりの句が「落栗の座を定めるや窪溜り」。６６歳の３月１０日、その塩原梅関方で亡くなりました。伊那に来て３０年、座を定める場所もできた井月は、今も塩原家の墓所に眠っています。

さて、『井月全集』を下島とともに出版した高津才次郎先生は、大正１３年、伊那高等女学校（現在の伊那弥生ヶ丘高校）に赴任され、まず井月の書にひかれ、『井月の句集』を読んで句にひかれ、句集に未収録の句がまだ伊那の地に相当数残されていると気付き、生徒や地域の協力で、全力をあげて収集を始めました。次々に『井月の句集』に未収録の句が発見されました。その一方で、実は井月の句ではないものが 220 句も紛れ込んでいたことを発見、それが「竄入句」（ざんにゅうく）なのです。



井月が亡くなる 2 年前、井月と誠に親しい人で六波羅霞松（かしょう）という人が、井月に筆を握らせて書かせた句があります。「この頃の長閑にへりぬ老の杖（玩章）」。実は、霞松はこの句帳を下島に見せなかったのです。ここから 220 句を書き写し、井月の句として下島に渡しました。霞松の考えは、実はこれらの句は全部井月のもので、それぞれの句に書き添えた名前(「玩章」など）はその人に花をもたせるためだったというのです。

しかし高津は疑問を持ち、その句の作者に直接当たって確かめたり、南信毎日新聞にこれらの句を掲載して読者に情報提供を呼びかけたりしました。克明な探索の結果、霞松が井月の句として下島に送ったものはすべて他人の句だと判断しました。新しく出版する『漂泊俳人　井月全集』(昭和五年）から、220 句すべてを削除し、そのかわり、「後記」に竄入句 220 句として俳名を添えて公表しました。普通だったら、違うことがわかったら取り除いてしまうのに、切り捨てないで後に置いたのです。

高津は下島が気の毒で、「少からず迷惑を蒙ったのは、神ならぬ『井月の句集』編者である」と書き添えています。そして、竄入句の中に、芥川が選んで応援してくれた句も入っていたので、大いに困りました。

昨年触れたことですが、芥川の応援をふりかえります。①下島勲が『井月の句集』(大正十年）を自費出版する前に、芥川龍之介はまず大正九年「雑筆」で井月の句を紹介しました。「何処やらで鶴の声する霞かな（辞世の句)」。②『井月の句集」（大正十年）出版の時、芥川龍之介が「跋」（後書き）を書いてくれました。その「跋」で、芥川が紹介した井月の句、「咲いたのは動いてゐるや蓮の花」。③芥川の短編小説「庭」(大正十一年）の中でも井月を紹介。「庭」の一節、「・・・それはこの宿の本陣に当る、中村と云ふ旧家の庭だつた。(略）長男は表徳(ひょうとく)を文室(ぶんしつ)と云ふ、癇癖(かんぺき)の強い男だつた。病身な妻や弟たちは勿論(もちろん)、隠居さへ彼には憚(はば)かつてゐた。唯(ただ)その頃この宿にゐた、乞食宗匠(そうしょう)の井月ばかりは、度々(たびたび)彼の所へ遊びに来た。長男も不思議に井月にだけは、酒を飲ませたり字を書かせたり、機嫌の好い顔を見せてゐた。『山はまだ花の香もあり時鳥(ほととぎす)、井月。ところどころに滝のほのめく、文室』。」芥川は、小説の中に井月の名前を出し、井月の句ものせていたのです。

芥川龍之介に井月を紹介をしてもらえば、この上もない応援となります。けれども実は、芥川が取り上げてくれた井月の句①は井月の句でしたが、②と③は井月の句ではなかったことが判明しました。「咲いたのは動いてゐるや蓮の花」は実は美篤の「山州」の句、「山はまだ花の香もあり時鳥」は実は四徳の

「思耕」の句でした。この上伊那の四徳には井月がよく通っていました。どちらも、下島編の『井月の句集』にのり、井月の句として出版されたものだったのですが、誤って井月の句ではないものとしてまぎれこんでいたのです。芥川が「跋」や「庭」で選んだ句は、そのまぎれこんだ句です。井月が巡り歩いた伊那谷の俳人たちの句であったのです。そのことで、伊那谷の俳人のレベルの高さを実感できるところが、実にすてきに思えるお話でもあります。

『井月の句集』を自費出版した下島にとっては大変なショックで、芥川に悪いことをしてしまったという思いでした。下島は伊那谷の、現在の駒ヶ根市中沢の出身で、東京の田端で楽天堂医院を開業、田端に住む芥川家の家族全員の主治医であり、文学的交流の上でも深い縁がありました。深い縁があるからこそ、芥川は「雑筆」や「跋」や「庭」を書いて、井月の存在を世に広く宣伝してくれたのです。その芥川が取り上げてくれた句が、井月の句ではなかったというのがわかった時、芥川はすでに亡き人となっていました。大変な申し訳なさでありました。

竄入句といえば、まちがいとして否定されてしまいますが、角度を変えれば、山州の句も思耕の句も、あの天才芥川龍之介の目にかなう、良い出来の俳句だったわけです。もともと井月が訪ね歩いた伊那地方などの良い出来だと思う句を、やがて出版するために書き留めていた句帳、その句帳の中の句だけあって、伊那の俳句をたしなむ人々のレベルの高さを示す句がたくさんあったのです。私たちは、竄入句をまちがいと悲しまず、芥川の目にかなうほどレベルの高い伊那谷だったんだと、驚きと喜びを感じるべきではないかと思います。もし井月の句ではないとして、初めから『井月の句集』に入っていなかったら、220 句の優れた伊那地域の句が、芥川の目にも、広く世間の人々の目にも触れてはいなかったのです。

伊那谷の俳句愛好者のレベルの高さを実感できるこれらの句、だからこそ、井月は伊那に３７歳のころに来て、明治２０年に６６歳の人生を終えるまで、ほぼこの地で俳諧の師として暮らすことができたのではないかと思います。俳諧の先生は、俳諧を愛する人々がたくさんいてこそ、その地をめぐり歩くことができます。井月の知識を愛し、書を愛する高いレベルの俳句好きの人々がいるからこそ、井月は暖かく迎えられ、泊まったり、お酒を振る舞われたり、食事を出してもらったりしながら、句を作りあう生活が成り立ったのです。

井月の日記が発見され、明治１７年５月１７日から１１月９日まで断続的につづき、翌明治１８年４月１０日から１３日まで書かれ、終わっています。これだけの短い日記でも、おおざっぱに、泊まった家１００軒、昼飯に寄った家２００軒と言われています。これはすごいこと。本当に乞食俳人と言えるのでしょうか。そんな井月を理解できる伊那谷の文化レベルのすばらしさを思うのです。

参加者の感想

○「竄入句」が残された経緯、そこに込められた井月に関わる人々の思い・・・とても興味深く聴かせていただきました。下島勲、高津才次郎というお二人の努力により、今、この時代に井月の生きた頃の時代の優れた俳句が残されている奇跡に感激しました。伊那谷の文化レベルの高さを誇りに思いたいです。改めて、俳句の魅力を見直したいと思いました。
○伊那谷にゆかりの深い井月の話をお聞きして、井月の伊那谷での暮らしぶりに伊那谷の人々のあたたかさを感じました。また、作者が違っている竄入句について、芥川龍之介もよいとするような俳句を伊那の一般の人々が詠んでいたというところが、伊那の人々の俳句のレベルの高さを感じるとともに、そのような俳人を生む伊那谷の環境や自然、暮らしを大切にしていきたいと思いました。堀井先生の優しい語り口と井月や伊那の人々の素敵な俳句に心温まる時間でした。講演ありがとうございました。
○井月の読み方も知らない勉強不足の私でしたが、芥川との関係やこの伊那谷とゆかりがあることを知り、今まで知らなかったことを「もったいないことだった」と感じるほどでした。俳句の授業を終えたばかりですが、来年の単元でこのような偉大な人が実は身近な存在であったと生徒にも伝えられるような授業をしたいと思いました。貴重な機会をありがとうございました。